

生産拠点の移転と海外直接投資の影響

フレデリック・サッチワルド

海外直接投資の大部分は、先進国から先進国に向けてのものである、というのが海外直接投資（FDI）に関する定説のひとつであった。例えば、80年代から90年代前半まで、経済のグローバル化は、必ずしも全世界的に広がった訳ではなく、米、欧、日の三極を軸に進展した。しかしながら、最近10年間については、多国籍企業は、途上国や体制移行国の多くを世界経済システムに取り込む上で重要な役割を果たしてきた。中国については度々議論されるが、EUの新規加盟国についても、そのグローバル化の過程において多国籍企業が果たした役割には大きなものがあった。

90年代を通じて、途上国へのFDIは着実に増加した。2004年からのFDIの回復の背景には、途上国向けFDIの増大がある。低所得国への多国籍企業活動の展開は、成長力の大きい市場を求めての動きであると同時に、安価な生産能力を求める動きでもあった。本レポートでは、これら二つの大きな進出動機の重要性が変わりつつあることが示される。最近では、世界的な生産ネットワーク構築に伴った生産拠点の移転・配置換えが、FDIの原動力となっている。